



↑男子100mバタフライ(視覚障害S13)を泳ぐ齋藤元希選手。

写真提供/山形新聞社

たくさんの方がパラスポーツに触れる機会を作ることができた

国際パラリンピック委員会は、スポーツを通じ、障がいのある人にとってより良い共生社会を実現することを理念としています。東京大会の開催が決定してから、日本でも、障がい者スポーツに関する、行政や教育、民間企業などのサポートが大きくなり、それがきっかけとなり社会そのものが変化を続けています。

元希選手は、「町民・県民の方など、たくさんの方がパラスポーツに触れる機会を作ることができた。」と語り、自身が東京大会に出場した意義を総括しました。

パリ大会ではメダル獲得を目指す

東京大会で得るものは多かったと話す元希選手。次回のパリ大会での目標を尋ねられると、「パリ大会ではメダルを獲得したい」と力強く語りました。今後も元希選手の挑戦は続きます。

初の現地応援できないパラリンピック

感染症の拡大で現地での応援がかなわなかった今大会。元希選手の実家は、父周治さんや母郁子さん、妹の未来さん、小中高時代に元希選手を指導した西尾雅樹さんがテレビを囲んで元希選手を応援していました。

5日間に渡って力強く元気な泳ぎで、国民に勇気と感動を与えてくれた元希選手。その元希選手をテレビで見守っていた母郁子さんから、大会を通しての感想と、応援していただいた皆さんへのメッセージをいただきました。

また感動を与えられるレースを見せてほしい

いよいよ大会本番。テレビの中の元希は、いつもの大会前と違い楽しそうに話していて、「これは…自己ベストを出せるかも」と、密かに思っていました。

連日のレースで疲労感も強く、途中食欲不振に陥ってしまったようでしたが、今までにないベスト更新ができて、

「この日のために本気でずっと頑張ってきたんだろうなあ…」と思いました。本当に良く頑張った！おめでとう！抱きしめてあげたい気持ちでいっぱいでした。

会った元希は、テレビの中と違いいつも通りの私のかわいい息子でした。「また、感動を与えられる笑顔いっぱいのリースを見せてください、ありがとうございます。」

これからもみなさんの応援よろしくお願ひします！



写真提供/山形新聞社

↑男子100m背泳ぎ(視覚障害S13)決勝を泳ぎ終えた齋藤元希選手。

